

ハンブルク北西郊における家屋構造と屋敷利用の変化

小林 浩二

I はじめに

民家は、長い年月にわたって、工夫をつみ重ねて形成された人間の営造物である¹⁾。それゆえ、民家は、自然的因子のみならず、社会的・経済的因子の影響を強く受ける。たとえば、民家に及ぼす風²⁾、地形³⁾、歴史的伝統⁴⁾、生産構造⁵⁾、社会的階層⁶⁾、都市化⁷⁾等の影響、またこれらの諸因子を包含した自然的因子、社会的、経済的因子⁸⁾の影響である。このようなことから、民家は、それをとりまく環境因子に適合した居住形態を形づくっている。

このような中で、近年になってあらわれた大きな特徴は、都市化が民家に及ぼす影響である。近年における都市化はめざましい。その結果、従来の生活手段であった農地や山林地は、住宅や工場などの都市的施設に変化している。それに伴って、都市周辺地域では、農業の縮小を余儀なくされ、生活の糧を都市へ求めるようになってきている⁹⁾。

このような生活基盤の変化は、居住様式に影響を及ぼさずにはおかない。すなわち、家屋の新築、改築、屋敷利用の変化などがおこなわれ、新しい生産様式や生活様式に適合した居住様式が生れている¹⁰⁾。その過程で、中心都市からのインパクトの相違は、居住様式に地域的差異をもたらしている¹¹⁾。

そこで、本研究では、都市化の著しい西ドイツの大都市ハンブルク近郊の民家を取りあげ¹²⁾、それがどのように変化してきたか、その際、どのような地域的差異が生じているのかを明らかにすることを試みる。時期は、都市化の著しくなった1955年以後とする。

民家は、中心となる家屋（母屋）、納屋、家畜小屋、倉庫、および、中庭、園地等からなっている。そして、それらが相互に結びついて、一つの機能体を構成している。本研究では、このうち、中心となる家屋（母屋）と屋敷とに分けて、それぞれの利用状況の変化を追う。これらの変化を明らかにするためには、家屋と屋敷の原型をはっきりさせる必要がある。そこで、ここでは、まず民家の原型を把握することから出発する。

調査対象地域は、都市化の著しいハンブルク北西郊である。ハンブルクは、人口182万(1970)で、ベルリンに次いで、西ドイツ第2の都市である¹³⁾。ハンブルクは、13世紀以来、港町、貿易都市として発展してきたが、第2次世界大戦によって大きな被害を受けた。当時65万存在していた家屋のうち、28万の家屋が破壊された。このような状況から人口も減少し、それまでの170万から110万になった¹⁴⁾。しかし、戦後の復興はめざましく、港の再建ならびに交通と貿易の拡大が進み、ハンブルクは、西ドイツにおける北の玄関として、重要な地位をしめるに至った。特に、1955年以後の発展はめざましく、高層住宅（Hochhaus）をはじめとする住宅機能や工業団地、さらには、ショッピングセ

ンターなどが周辺地域へ進出している¹⁵⁾。このような都市機能の進出はハンブルクとその周辺地域を対象とした土地利用計画に基づいて、計画的に進められている¹⁶⁾。そのため、都市化の進展が激しいにもかかわらず、整然とした土地利用形態を見ることができる。

調査対象地域は、ハンブルク北西郊、中心部（ハンブルク中央駅）から10~23kmに位置している。この地域は、ハンブルク州のStadtteil である Osdorf, Sülldorf, Iserbrook, Rissen, シュレースビヒホルシュタイン州の Gemeinde に属する Schenefeld, Halstenbek, Pinneberg, Prisdorf, Appenを含む¹⁷⁾ (Abb. 1)。この地域は、ハンブルク郊外の中でも都市化が激しく進んでいる地域である¹⁸⁾。特に、シュレースビヒホルシュタイン州からの人口の流入が激しく、住宅団地やアインツェルハウス (Einzelhaus) と呼ばれる一戸建て住宅、各種の商業施設が次々と建設されている。このような状況から、人口数も1950年以後全域第増加しており、特に、Pinneberg, Osdorf, Schenefeld など、ハンブルクの中心から20km以内の地区で著しい (Abb. 2)。一方、これに対応して、周辺農村地域の変化も激しく、農家数、耕地面積は減少傾向をたどっている。また、当然のことながら、家屋構造や屋敷利用にも変化が見られる。

ここでは、ハンブルク北西郊における家屋構造と屋敷利用の変化を明らかにするため、調査地域内

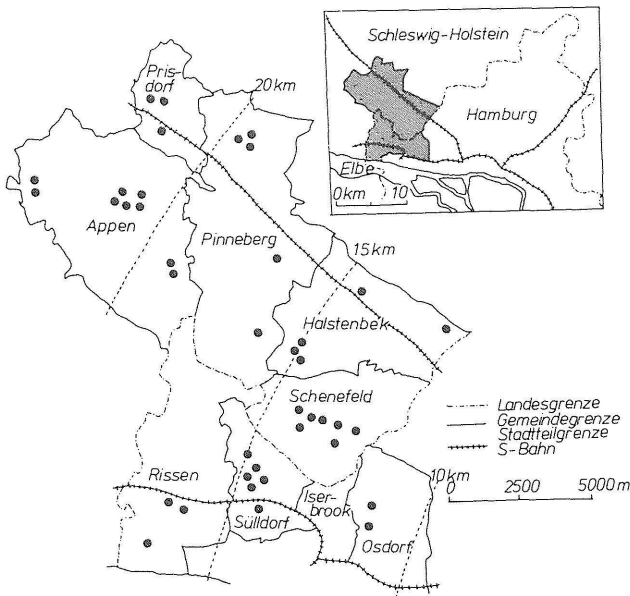
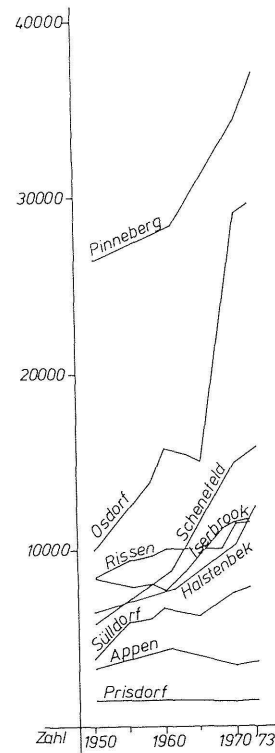


Abb. 1 Untersuchungsgebiet und landwirtschaftliche Betriebe für Interviews



Quelle: Statistik des Hamburgischen Staates (1950), Statistische Berichte (Hamburg), Gemeindestatistik, Kreis Pinneberg der Landesrat (Schleswig-Holstein)

における農家40戸を選び¹⁹⁾、観察と聞き取り調査をおこなった²⁰⁾。そして、各農家で得られた資料を、各 Stadtteil および Gemeinde の landwirtschaftliche Genossenschaft, および Kommunal Verwaltungにおける聞き取り調査によって補足した。

Abb. 2 Veränderungen der Einwohnerzahlen

II 家屋構造の変化

II-1 民家の原型

この地域の民家は、ニーダーザクセン型民家、Niedersachsenhaus、あるいは、Niederdeutsche Hallenhaus と呼ばれる。ニーダーザクセン型民家は、シュレースビヒホルシュタイン州からノルトラインヴェストファーレン州北部にかけて見られる²¹⁾。この民家の原型は、13~14世紀にさかのぼる。当時、壁はオーク材の厚板 (Eichenbohlen) で張られていたが、17世紀になって、オーク材の不足、それに伴う木材消費の節約により、バックシュタイン (Backstein) と呼ばれるレンガが利用されるようになった。19世紀になると、このバックシュタインは、ツィーゲルシュタイン (Ziegelstein) と呼ばれるレンガに変わった²²⁾。このような家屋材料の変化に伴って、10世紀半ばになって、屋根型や間取りもしだいに変化し、現在のニーダーザクセンハウスと呼ばれる家屋形態が成立した²³⁾。

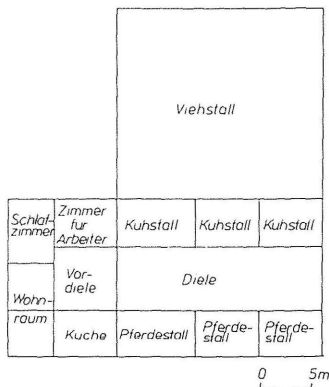


Abb. 3 Allgemeine Raumverteilung des Hauses

まず、この民家の間取りを見ると (Abb.3)、幅 3 m、高さ 3 m におよぶ入口がある。この入口に続いて、ディーレ (Diele) と呼ばれる細長い物置場がある。ディーレには通常トラクターなどの大型農業機械が置かれるが、その他、ここは穀物の一時的な置場にも利用される。ディーレは土間であるが、外部からの湿気を防ぐため、粘土が敷かれている。ディーレの北側は牛小屋 (Kuhstall)、南側は馬小屋 (Pferdestall) である。しかし、近年における馬の減少、ならびに、牛の増加による牛小屋の新設、増設に伴って、従来の畜舎が不必要となったため、住居用の部屋に改築されたり、そのまま放置されて物置に利用

される例が多くなってきた。

ディーレのつきあたりは、フォアディーレ (Vordiele) と呼ばれる荷物置場である。フォアディーレは、ディーレと同様、通常、土間で粘土が敷かれている。しかし、そこに床とジュウタンをつけ、居間として利用する家屋も増加してきた。

フォアディーレの北側は、農業労働者のための部屋で、彼らはここに寝泊まりする。また、フォアディーレの南側には、大きな台所 (Küche)、西側には、家族用の部屋がある。家族用の部屋の配置を見ると、一番北側の部屋が寝室 (Schlafzimmer) となるのが普通である。しかし、その南側の配置には決った原則はなく、家族の構成員数に応じて、居間、子供部屋 (Kinderzimmer) 等にわりあてられる。

牛小屋の北側は家畜小屋 (Viehstall) で、ここには、主に牛と豚が飼育される他、農機具、冷凍施設なども置かれる。この家畜小屋は、飼料作物の収穫量の増大に伴い、1890年代になって多く建設された。

このように、ニーダーザクセン型民家は、人間が居住する部分 (居住部分 Wohnteil)、と家畜小屋

や農機具置場などの部分（経済部分 Wirtschaftsteil）とに分かれている。

また、屋根裏には、ボーデン (Boden) あるいはコルンボーデン (Kornboden) と呼ばれる大きな屋根裏部屋が存在している。ここは、農作物や干し草が貯蔵される所である。屋根型を見ると、寄棟か切妻である。これらの屋根はかなり急傾斜である。近年、室内を広く利用する必要性が増すにつれて、切妻の屋根型が増加してきた。屋根材料は、通常、藁（大麦）か葦 (Schilfrohr と呼ばれるあし) の一種) であるが、屋根ふき職人の減少、開墾による葦場の減少、それに伴う大量の瓦製造によって、瓦ぶき屋根が増加している。

家屋の大きさは、間口30~40m、奥行き20~40mが普通で、面積は600~1,500㎡である。

ニーダーザクセン型民家の原型は、このようになっているが、ディーレ、家畜小屋、台所の位置等、各民家で相違が認められるのはいうまでもないことである。

Ⅱ-2 家屋構造の変化

生産様式や生活様式の変化に伴い、家屋構造は変化する。この地域においても、新築、改築が相つぎ、家屋構造は大きく変化している。調査農家40戸について、1955年から1975年における家屋（母屋）の新築、改築状況を見ると (Abb. 4)、新築した農家5戸、改築した農家29戸、新築、改築をおこなわなかった農家6戸²⁴⁾となっており、新築、改築した農家は全体の85%にものぼっていた。

新築した農家の多くは、従来の家屋が1800年代あるいは1900年代初期に建設されたものであったため、現代の生活様式に適合しなくなったものであった。新築家屋を見ると、その規模が従来のものに比較して小さく、各部屋も小さくなっていること、それに対して、家畜小屋は大きいこと、浴室やシャワー室が必ずつけ加わっていること²⁵⁾、瓦ぶき切妻の屋根型であること等に特色がある。

改築された家屋を見ると、まず、浴室および台所から改造され、その後、居間、寝室、子供部屋の改造、さらに、それに伴って、壁の塗り替え、床の張り替え、ジュウタンの更新等がおこなわれているのが一般的である。また、従来のレンガの上に新しいレンガをはりつけ、外装を美しくしている家屋も見られる。また、1960年以後は、セントラルヒーティングおよび水道の付設がひんぱんにおこなわれ、それによって、住生活が大きく改善されるようになってきた。さらに、搾乳機、冷凍施設、サイロなどが装備され、それに伴って家畜小屋の改築も進んできた。このような家屋内部の改造とともに、屋根材料や屋根型も変化し、従来の藁ぶき寄棟あるいは葦ぶき寄棟から、瓦ぶき切妻へ移行してきた。

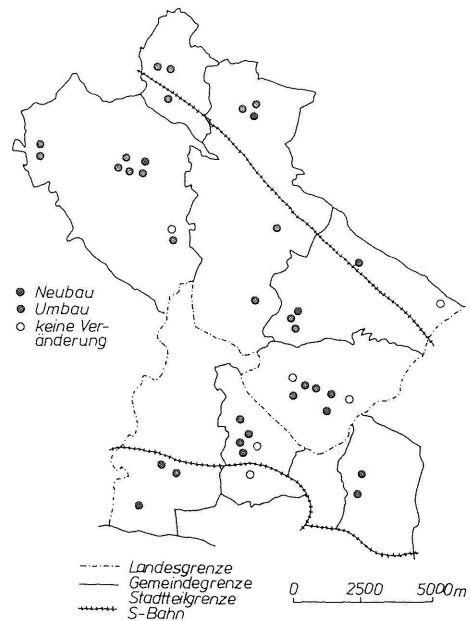


Abb.4 Neu-und Umbau des Hauses (1955-1975)

地域的に見ると、新築および改築がおこなわれた農家は全域にわたって見られる。

III 屋敷利用の変化

III-1 屋敷の一般的な利用

この地域における屋敷は、ほぼ長方形で、その大きさは、80~100m×60~90m、面積4,000~8,000㎡が一般的である。そして、屋敷のまわりは、通常、生垣、レンガブロックによる万年堀、金網堀、格子堀等によって囲まれている。屋敷の中には、母屋（Hauptgebäude）、納屋（Scheune）、倉庫、鶏舎、ガレージ等が存在している。母屋はすでに述べたように、ほとんどの場合、家畜小屋と一続きになっている。納屋は、屋敷内に一つか二つ存在し、農機具置場や干し草の貯蔵所等に利用される。また、ガレージは、自動車の普及につれて、1955年以後多く建設されるようになってきた。中には、納屋を改造してガレージにしている農家も見られる。これらの建物の間はホフ（Hof）と呼ばれる中庭で、そこは、遊び場、物干し場、堆肥場、花壇などに利用される。また、屋敷の片隅には、園地（Garten）があり、通常、自給用の野菜が栽培されている。

これらの各建物、中庭、園地の配置を見ると、母屋は、屋敷のほぼ中央に位置し、その斜め前に、納屋、倉庫、ガレージ等の建物がある。そして、これらの建物の間が中庭となっている。一方、園地は、母屋の裏に位置している。

III-2 屋敷利用の変化

この地域におけるこのような屋敷形態は、しだいに変化してきた。中でも、特に著しい現象は、家屋、納屋などの建物の新築、改築であった。調査農家40戸について、母屋を除く住居用家屋と、納屋や物置などの農業用施設の変化を見ると、1955年以後、新たに住居用家屋を新築した農家3戸、農業用施設を新築あるいは改築した農家20戸、住居用家屋を新築し、さらに、農業用施設を新築、改築した農家11戸、住居用家屋の新築、農業用施設の新築、改築をおこなわず、1955年以後全く変化しなかった農家6戸²⁶⁾となっており、住居用家屋の新築あるいは、農業用施設の新築、改築いずれかをおこなった農家は、全体の75%に達していた。

新たに建設された住居用家屋は、通常ブンガロー（Bungalow）と呼ばれる一階建ての小さな家屋である²⁷⁾。この家屋は、家族の住居として利用される場合と、貸家として利用される場合とがある。新たに建設された家屋が家族の住居として利用される場合²⁸⁾、従来の古い家屋（母屋）には、息子（または息子夫妻）が居残るのが一般的である。この場合、息子の結婚が契機となって建設されることが多い²⁹⁾。

また、新たに建設された家屋が貸家として利用される場合は、農業が減少し、農業以外の収入が必要となったため、建設するものである³⁰⁾。その意味で、貸家建設は、農業の後退を示す一つの過程といえよう。地域的に見ると、貸家を所有する農家は、都市化の著しいOsdorf, Sülldorf, Rissen, Schenefeld, Halstenbek, Pinneberg に集中している。これらの地区は、ハンブルクの中心からほぼ15~20km以内にある（Abb. 5）。

一方、農業用施設の新築、改築は、農業経営の変化と密接に結びついている。すなわち大型機械の導入、農業用施設の近代化に伴い従来より広い、そして、能率的な機械置場、作業場が必要となり、施設の新築、改築がおこなわれたものである。納屋の新築、改築、作業場を兼ねた倉庫の建設、ガレージの建設などは、この典型的な例である。このような農業用施設の新築、改築は、この地域全域に見られる。

また、これとは別に、納屋および納屋の一部を改築して、貸家や農業労働者用の家屋として利用する農家も存在している。納屋および納屋の一部を貸家として利用する農家は、貸家を所有する農家の分布と同じく、ハンブルクの中心から15~20 km以内の地区に見られる。農業労働者用として利用する農家は、これより外側の地区に多い。

一般に、これらの施設は、屋敷内に建設される他、屋敷続きの畑地や牧草地を利用して建てられている。

その他、中庭や園地にある花壇、菜園の整備や拡充、レンガブロック、金網、主につげの生垣等による屋敷の境界の設定がおこなわれている。花壇や園地の整備、拡充は、この地域の調査農家すべてに見られる。しかし、レンガブロック等による屋敷の境界設定は、ハンブルクの中心から15~20km以内の農家でおこなわれているが、それより離れた地区では少ない。これは、ハンブルクの中心に近い地区では、各民家が密集し、そのため、それぞれの屋敷が隣合せになっていること、それに対して、ハンブルクの中心から離れた地区では、屋敷続きがその農家所有の畑地や牧草地になっているため、必ずしも境界の設定が必要でないことによるものである。

VI 家屋構造・屋敷利用変化の事例

すでに述べた事実から明らかのように、家屋構造・家敷利用の変化から見ると、この地域の農家は、地帯別に、大きく2つに区分できる。一つは、ハンブルクの中心から15~20km以内に位置する農家、他の一つは、それより外側に位置する農家である。そこで、ここでは地帯別に4つの農家を取りあげ、家屋構造と屋敷利用の変化について、具体的に述べてみる。A農家、B農家は、ハンブルクの中心から15~20km以内にあり、C農家、D農家は、それより外側に位置している。

A農家 (Hamburg, Rissen)

この農家の家族は、世帯主(27歳)、その妻(27歳)、世帯主の父母(60歳、60歳)の4人である、4人とも農業に従事している。

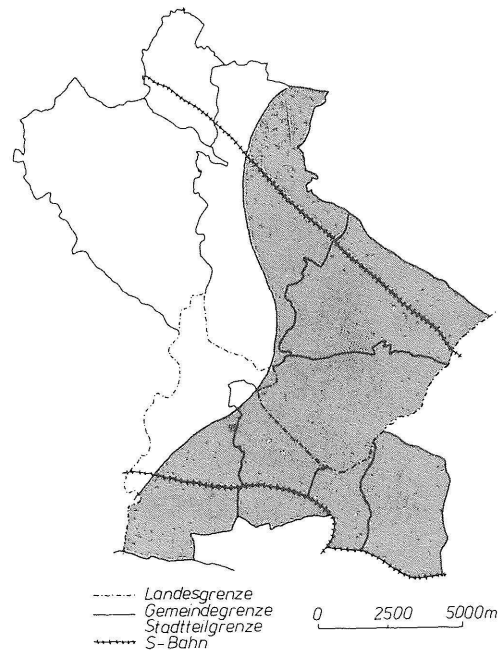


Abb.5 Gebietem mit Mietshäuser

この農家の母屋は、1770年に建てられた古いもので、建坪は約 500㎡である。玄関を入ると台所があり、台所の北側が寝室、両側が食堂で、それに続いて貯蔵室 (Vorratsraum) がある。台所を進むと、つきあたりはディーレである。ディーレの北側には、事務室および居間が存在し、南側には、飼料置場 (Futterraum) がひろがっている。飼料置場の西側には、浴室、シャワー室、機械室 (Maschinenraum) がある。また、これらの各部屋の南側には、牛小屋、豚小屋、ガレージ等を備えた大きな家畜小屋が存在している。

この農家では、1955年 以来、数回にわたり家屋の改築、改造がおこなわれてきた。まず 1969 年には、セントラルヒーティングが付設され、また、従来の藁 (大麦) ぶき屋根が瓦ぶき屋根に変えられた。1970年には、それまでのディーレが玄関を兼ねた台所に、また、物置として利用されていた部屋が、浴室、貯蔵室、シャワー室の 3つの部屋に、それぞれ改造された。さらに、1971年には、牛小屋および豚小屋、そして、1973年には、冷凍施設の更新に伴い、冷凍室が改造された。

母屋は、東西40m、南北50m、面積 2,000㎡ の長方形屋敷の中の南東部に位置している。母屋の西側には、1850年に建設された納屋、1953年に建てられた機械用倉庫、および、1961年に建設された鶏舎が存在している。これらの建物の北側には、園地がひろがっている。ここは、自給用菜園で、セロリ、きゃべつなどが栽培されている。園地の北部には貸家がある。この貸家は、1969年に建設されたものである。貸家が建設される以前、ここは園地であった。この貸家には、現在、Stülldorf から転居してきた一家族 4人が居住している。

屋敷の東側の道路との境界に沿っては、1953年に設けられた高さ 1.2m の金網が張られている。

農家 B (Schleswig-Holstein, Schenefeld)

この農家は、世帯主 (47歳)、その妻 (45歳)、長男 (19歳)、長女 (18歳)、次男 (17歳)、3男 (16歳)、次女 (13歳)、3女 (10歳) の 8人家族である。世帯主夫妻は、農業に従事しており、長男は見習工 (Lehrling) 長女、次男、3男はギムナジウムの学生、次女、3女は小学校に通学している。

この農家の母屋は、1912年に建設され、その面積は約300㎡である (Abb. 6)。家屋の東側のほぼ中央に玄関があり、廊下に続いている。以前は、廊下の北側に 2つの居間が存在していたが、1970年、その一つが改造され、寝室に変えられた。廊下の南側には、2つの子供部屋、ディーレ、2つのガレージ、牛乳貯蔵室 (Milchkammer) が存在している。ここは、以前馬小屋であったが、子供が成長し個室が必要となったため、1969年、子供部屋に改築された。廊下のつきあたりは、台所である。台所の南側は、控えの間 (Vorraum)、北は居間になっている。居間は、寝室ができる以前寝室として利用されていた。また、1970年には、居間と台所の西側に新たに居間が増築された。そこには、テレビ、ソファ等が置かれており、家族の団欒の場になっている。控えの間の南側には、大きな面積をしめる家畜小屋が存在し、そこで乳牛が飼育される他、穀物置場、搾乳場が備えつけられている。家畜小屋の西隣りは、サイロおよび牛小屋で、こ

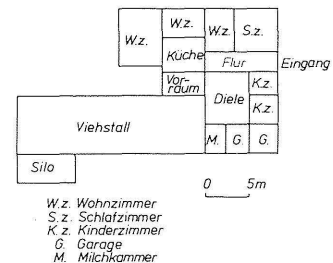


Abb. 6 Raumverteilung des landwirtschaftlichen Betriebs B

れらは、1965年から1963年にかけて建設された。サイロおよび牛小屋は、乳牛飼育頭数が増加したため、建設されたものである。また、1964年には、セントラルヒーティングが付設され、1970年には、窓ガラスが2重に改善された。さらに、1964年と1972年には、浴室と便所が改築され、1968年から1972年にかけては、床のジュンタンの更新、および、新しいレンガによる外装の改善がおこなわれた。

このような母屋の変化とともに、屋敷利用も変化した。まず、1960年当時を見ると(Abb. 7), 屋敷は、母屋、1750年に建てられた納屋(この建物は、一部農業労働者のために利用されていた)、1915

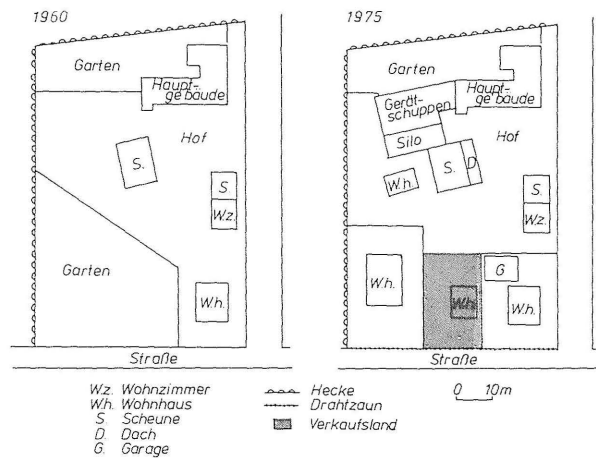


Abb. 7 Nutzung des Wohngrundstücks im landwirtschaftlichen Betrieb B

年に設立された納屋、1955年に設立された家屋、および、中庭、園地からなっていた。また、屋敷の西側と北側の境界に沿っては、つげの生垣が植えられていた。その後、1956年から1959年にかけてサイロ (Silo) が作られ、1960年には、母屋とサイロをつなぐ形で、機械用倉庫 (Gerätschuppen) が建設された。1964年には、ガレージが中庭に建てられ、また、屋敷南部の園地の一部 600 m^2 が、 1 m^2 当たり 500 マルクで世帯主の弟に売却された。ここには、その後1966年、世帯主の弟の家屋が建設された。1971年になると、やはり、屋敷南部の園地だった所に貸家が建設された。この貸家は3階建てで、そこには、現在6家族が入居している。さらに、1975年には、農業労働者のための家屋が建てられた。そのため、それまで農業労働者が居住していた家屋は、改築され、貸家として利用されるようになった。現在そこには、Pinneberg から移転してきた若夫妻が居住している。このように、この農家では、家屋、特に貸家が増加した。また、屋敷の一部が切売りされたため、屋敷面積は減少し、1960年当時の $5,500\text{ m}^2$ から1975年の $4,900\text{ m}^2$ になった。

金網による垣根は、1965年から1968年にかけて、屋敷の南側に設けられ、従来の屋敷の北側、西側に並ぶつげの生垣と合わせて、屋敷の3方をとり囲んでいる。

農家C (Schleswig-Holstein, Appen)

この農家は、世帯主 (40歳)、その妻 (39歳)、長男 (16歳)、長女 (13歳)、次女 (11歳)、世帯主

の母 (68歳) の 6 人家族である。その他、世帯主の姉 (41歳) が同居している。農業従事者は、世帯主夫妻と世帯主の姉の 3 人である。また、長男は、農業見習生、長女、次女は、ギムナジウムの学生である。

この農家の母屋は、1892年に建設された (Abb. 8)。その大きさは、間口32m、奥行き17m で、建

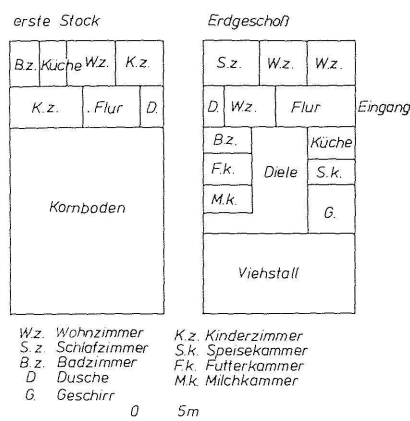


Abb. 8 Raumverteilung des landwirtschaftlichen Betriebs C

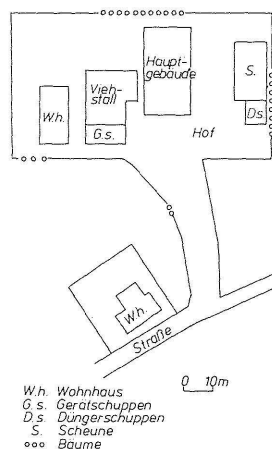


Abb. 9 Nutzung des Wohngrundstücks im landwirtschaftlichen Betrieb C

坪は約 550㎡ である。玄関を入ると、廊下がりあり、廊下のつきあたりは居間である。居間の西側は、シャワー室になっている。シャワー室は、1974年、従来の居間に支切りをつけて作られたものがある。また、廊下の北側は、居間、居間の西側は寝室となっており、廊下の南側には、ディーレがひろがっている。さらに、ディーレの東側には、北から、台所、食物貯蔵室 (Speisekammer)、道具置場 (Geschirr) があり、西側には、北から、浴室、飼料貯蔵室 (Futterkammer)、牛乳貯蔵室 (Milchkammer) が並んでいる。浴室は1972年改造され、また、牛乳貯蔵室も大型冷凍施設の導入により1972年に改造された。

これら各部屋および施設の南側には、1913年に建設された家畜小屋が存在している。この中には、牛小屋、豚小屋がある。この家畜小屋は、乳牛と豚の増加に伴い1973年に改築された。

この家屋は2階も利用されている。2階の間取りを見ると、北側に、子供部屋、台所、浴室等が存在し、それらの南側には、大きな屋根裏部屋 (Kornboden) がある。屋根裏部屋は、干し草の貯蔵場所になっている。一方、屋根は、1970年まで藁 (大麦) ぶきの切妻であったが、1971年材料が瓦に変えられた。また、この年には、セントラルヒーティングが付設された。

この農家の屋敷は、2つに分かれている (Abb. 9)。一つは、東西90m、南北50mの長方形の屋敷で、その面積は4,500㎡である。他の一つは、面積1,200㎡の屋敷である。面積4,500㎡の屋敷の中には、母屋の他、1892年に建設された納屋と家畜小屋、1948年に建てられた機械用倉庫 (Gerätschuppen)、堆肥小屋 (Düngerschuppen)、農業労働者のための家屋が存在している。納屋と家畜小屋は、その後1955年になって改築された。これらの建物の配置を見ると、母屋は屋敷のほぼ中央に位置し、母屋の

東側には、納屋と堆肥小屋、西側には、家畜小屋、機械用倉庫、農業労働者の家屋がある。母屋と納屋および堆肥小屋との間は、中庭になっている。また、面積 1,200 m² の屋敷の中には、1932 年に建設された農業労働者のための長屋が存在している。この長屋は、農業労働者の減少とともに不必要となり、1971 年以後利用されていない。

これら 2 つの屋敷のまわりには、ブナの木が数本植えられている。しかし、屋敷をとり囲む生垣、木堀等は見られない。これは、屋敷のまわりが、この農家所有の畑地と牧草地になっているためである。また、この農家では、屋敷内に園地が見られない。これは、屋敷続きの畑地の一角に野菜畑があり、ここで自給用の野菜が栽培されているためである。

農家 D (Schleswig-Holstein, Prisdorf)

この農家は、世帯主 (59 歳)、その妻 (44 歳)、長男 (23 歳)、次男 (21 歳)、長女 (7 歳) 世帯主の母 (82 歳) の 6 人家族である。世帯主夫妻、長男の 3 人が農業に従事しており、次男は機械見習工、長女は小学校の生徒である。

この農家の母屋は 1914 年建設され、その建坪は 350 m² である。ディーレの入口は、母屋の西側に位置し、そこから東に向かってディーレが伸びている。ディーレの北側は、豚小屋、農機具置場、浴室、南側は、牛小屋、冷凍室、台所である。浴室と台所は、1965 年、それまでの豚小屋と牛小屋が改築されたものである。また、ディーレ、豚小屋、農機具置場は、1968 年改造されたが、これは豚飼育の増加および各種大型農機具の導入に伴い、改良されたものである。ディーレのつきあたりは、家族用の部屋が並んでいる。これらの部屋は、北から、居間、寝室となっている。屋根型は瓦ぶき寄棟である。

このような構造を持つ母屋は、東西 90 m、南北 70 の屋敷の南東隅に位置している。母屋の西側には、納屋、子供用家屋、ガレージがある。納屋は 1935 年に建設され、子供用家屋は、1946 年納屋として建設されたが、1960 年子供用家屋に改築された。また、ガレージは、1968 年それまでの屋敷続きの牧草地に建てられた。

母屋の東側には園地があり、ここでは自給用の野菜が栽培されている。中庭は、母屋の西側にひろがっており、ここは、遊び場、堆肥場、干し草置場に利用されている。また、ここには、1960 年作られた花壇があり、各種の花が栽培されている。

屋敷の南側の道路の境界沿いは、バラの生垣が植えられているが、他の 3 方は、この農家所有の牧草地になっているため、屋敷の境界沿いの垣根や金網は見られない。

V 結 び

ハンブルク北西郊における家屋構造と屋敷利用は、近年大きく変化しつつある。1955 年から 1975 年までの間に、母屋の新築・改築をおこなった農家は、全体の 85%、母屋を除く住居用家屋の新築、納屋や物置などの農業用施設の新築改築いずれかをおこなった農家は、全体の 75% に達していた。また、大部分の農家では、中庭や園地にある花壇や菜園の整備・拡充、レンガブロック、金網、主につげの生垣による屋敷の境界設定がおこなわれていた。

このような中で、家屋構造、屋敷利用の変化した農家を見ると、地域的に大きく 2 つに区分できる

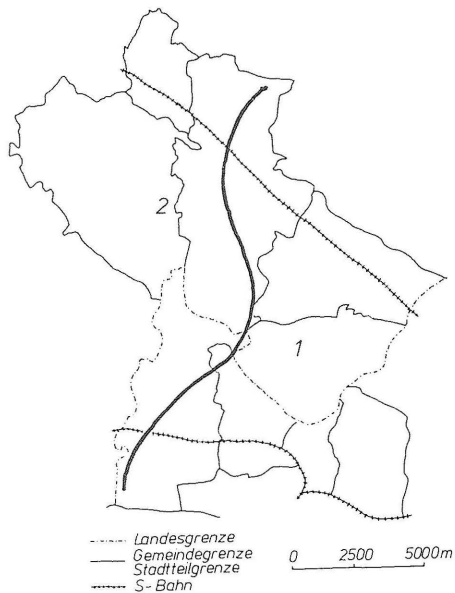


Abb. 10. Verbreitung des Haustypus

(Abb. 10).

一つは、ハンブルクの中心から15~20km以内に位置する農家である。ここに位置する農家においては、母屋の新築、あるいは、セントラルヒーティングや水道の付設、風呂場や便所の改造、寝室、子供部屋等の改造、それに伴う壁の塗り変え、ジュウタンの更新、家を囲むレンガに新しいレンガをはりつけ、外装を美しくすること等の改築がおこなわれている。また、牛小屋や豚小屋の改造、農機具置場の改造、冷凍施設の導入による冷凍室の新設、改築等、経済部分の改善も進んでいる。一方、屋敷利用の変化を見ると、貸家の新設、納屋の貸家や貸間への転用、納屋の新築、改築、倉庫の建設、花壇や園地の整備・拡充、屋敷をとり囲む生垣や金網の整備がおこなわれている。

他の一つの型は、ハンブルクの中心から10~15km以上離れた地区に見られる農家である。ここに位置する農家は、家屋構造の点から見ると、前の農家型とほぼ同じ変化を示している。しかし、屋敷利用の変化は相違している。すなわち、納屋の新築・改築、花壇や園地の整備拡充はおこなわれているが、貸家経営は存在せず、また、屋敷をとり囲む生垣、金網等の付設は少ない。

このようなハンブルクを中心として見られる民家の地域的差異は、都市化に対する農家の適応形態の差に基づくものである。それゆえ、ハンブルク北西郊においては、都市化に対応した家屋構造と屋敷利用の変化がおこなわれているといえるであろう。

註・参考文献

- 1) 杉本尚次 (1973) : 最近の民家研究. 人文地理, 第25巻. p. 551.
- 2) 矢沢大二 (1953) : 気候景観. 古今書院, pp. 112~142.
- 3) Scholy, H. (1956) : Die Trulli Apuliens, Beitrage zur Siedlungsgeographie von Süditalien, Geographica Helvetica 4. ss. 236~241.
- 4) Miller-Wille (1936) : Haus und Gehöftformen in Mitteleuropa, Geogr. Zeitschr. 42. ss. 121~136.
- 5) Schröder, H. (1949) : Weinbau und Siedlung in Wuttenberg, Forschung zur Deutschen Landeskunde, 47.
- 6) 山本正三 (1973) : 茶業地域の研究. 大明堂. pp. 198~209.
- 7) Dickinson, R. (1953) : The House, The west European City, Keganpaull London. pp. 487~503.
マッキュアン, J. R. (1954) : ダンディ市の住宅. 人文地理, 第6巻, pp. 373~378.
- 8) Ehemann, K. (1953) : Das Bauernhaug in der Wettenau und im SW-Voglsberg, Forschungen zur Deutschen Landeskunde, 61.
- 9) 小林 博 (1961) : 都市と都市化. 生態地理学, 朝倉書店. pp. 143~147.
- 10) 佐藤甚次郎 (1967) : 日本の住居(1)——その地理的特徴の素描——地理, 12巻4号 p. 81.
- 11) 松田信 (1971) : 地理的複合概念の展開. 人文地理, 第23巻 p. 82.

- 12) 特にドイツの農村を研究する場合、屋敷利用などの景観把握は重要な意味を持つ。浮田典良 (1970) : 北西ドイツ農村の歴史地理学的研究。大明堂 pp. 7~8.
- 13) Gemeinde statistik, 1970.
- 14) Dähn, A. (1955) : Die Zerstörung Hamburgs in Kriege 1935—1945, Hamburg und seine Bauten 1929~1953, Hoffmann und Campe Verlag. ss. 28~38.
- 15) Jaschke, D. (1973) : —Reinbek— Untersuchungen zum Sturkturwandel im Hamburger Umland, Institut für Geographie und Wirtschaftsgeographie der Univ. Hamburg, Verlag Ferdinand Hirt. ss. 71~137.
- 16) Freie und Hansestadt Hamburg (1971) : Die Baujahre 1966~1969, Hamburger Schriften zum Bau, Wohnungs- und Siedlungswesen.
- 17) ハンブルグ州における Stadteil, およびシュレースビッヒホルシュタイン州の Gemeinde は、ほぼ日本における市町村に相当する。
- 18) 前掲 15). ss. 59~61.
- 19) ここでは、従来の民家の姿をとどめている農家を選んだ。
- 20) 農家の聞き取り調査と観察は、1974年8月から、1975年6月にかけておこなった。
- 21) Thiede, K. (1963) : Bauernhäuser in Schleswig-Holstein, Weltholsteinische Verlagsanstalt Boyens und Co. s. 5.
- 22) 前掲 21) ss. 5~10.
- 23) Hannesen, H. (1959) : Die Agrarlandschaft der Schleswig-Holstein Geest und ihre neuzeitliche Entwicklung, im Selbstverlag der geographischen Institut der Univ. Kiel. ss. 42~45.
- 24) この場合、2つの理由が考えられる。一つは、新たに他の場所に家屋を建て、その後、新築の家に居住したため、古い家屋を改造する必要がなかった場合、他の一つは、第2次世界大戦で家屋を破壊され、その後新築したため、家屋を改造する必要がなかった場合である。
- 25) 従来の農家では、家屋の中に風呂場やシャワー室を所有していない農家は比較的多かった。このような農家では、大きな桶を用意して、それを利用して、身体を洗っていた。
- 26) この種の農家は、1955年までに住居用家屋、農業用施設とも整備が進んでいた農家に多い。
- 27) この家屋の新築費用は、通常息子が出費する。しかし、息子が家屋を新築するお金を所有していない場合は、両親が援助する。そして、お金の余裕ができた時点で息子は両親に返済する。
- 28) 調査農家40戸のうち、この農家は少なく、わずか2戸をしめるのみであった。
- 29) 息子が結婚しなくても、新たに家屋を建設する農家も見られる。
- 30) 通常、1カ月350~600DMで貸す。

Wandel der Hofstatt (inkl. der Hausstruktur) in den nordwestlichen Randgebieten von Hamburg

Koji Kobayashi

Die Hofstatt ist das von Menschen gebaute Haus und seine Umgebung. Sie wird deshalb nicht nur von Naturfaktoren wie Wind, Gelände usw. sondern auch von Sozial- und Wirtschaftsfaktoren wie historische Gewohnheit, Produktionsstruktur, Sozialhierarchie, Verstädterung usw. stark beeinflusst. Die Hofstatt gestaltet daher die Umweltfaktoren entsprechenden Wohnformen.

Der Einfluß der Verstädterung auf die Hofstatt ist in den letzten Jahren charakteristisch. Die Verstädterung ist jetzt sehr stark und bisheriges Acker- und Waldland verändern sich durch die städtische Landnutzung. Damit nimmt in den Stadtrandgebieten die Landwirtschaft ab und die übrig gebliebenen Bauern fördern ihre Erzeugnisse in die Stadt.

Solche Veränderungen der Lebensbasis üben auf die Wohnformen Einfluß aus: Neu- und Umbau des Hauses, Veränderungen des Hofes usw. werden ausgeführt. Dadurch ergibt sich die der neuen Produktions- und Lebensform entsprechende Wohnweise. In diesem Prozeß bringt der unterschiedliche

Verstädterungsstoß der Wohnweise die räumliche Differenzierung.

In dieser Arbeit wurde klargemacht, wie sich die Hofstatt in den Randgebieten Hamburgs, in denen die Verstädterung sehr stark fortschreitet, räumlich verschieden verändert. Behandelt wurden die Veränderungen nach 1955, weil die Verstädterung seitdem stark zugenommen hat.

Hofstatt besteht aus Hauptgebäude, Scheune, Viehstall, Lagerhaus, Hof, Garten usw. Diese bilden einen funktionellen Komplex. In dieser Arbeit werden die obgenannten einzelnen Komponenten in Hausstruktur und Hofbenutzung eingeteilt und ihr Wandel betrachtet.

Das Untersuchungsgebiet schließt die nordwestlichen Randgebiete von Hamburg ein, die 10~23 km von Stadtzentrum (Hamburg Hbf) entfernt liegen (Abb. 1). Dieses Gebiet umfaßt Hamburgs Stadtteile Osdorf, Sülldorf, Iserbrook und Rissen und die Gemeinden (in Schleswig-Holstein) Schenefeld, Halstenbek, Pinneberg, Prisdorf und Appen. In diesem Gebiet schreitet die Verstädterung sehr stark vor. Ein Großteil der Bevölkerung wandert aus Schleswig-Holstein ein und Einzel- und Doppelhäuser, Hochhäuser, Wohnblöcke und Einkaufszentren werden gebaut. Die Einwohnerzahlen nehmen daher in allen Stadtteilen und Gemeinden zu, besonders stark in Pinneberg, Osdorf und Schenefeld, innerhalb 20 km vom Stadtzentrum entfernt. Damit verändern sich die Stadtrandgebiete sehr stark: die Zahl der landwirtschaftlichen Betriebe und die Anbaufläche nehmen ab. Auch wandeln sich die Hausstruktur und Hofbenutzung auffallend.

Um den Wandel der Hofstatt zu betrachten, wurden 40 landwirtschaftliche Betriebe in diesem Gebiet ausgewählt und dort Beobachtungen und Interviews gemacht. Das in den Beobachtungen und Interviews gewonnene Material wurden auch von Interviews in Kommunalverwaltungen und landwirtschaftlichen Genossenschaften ergänzt.

Die klar gewordenen Tatsachen werden im folgenden zusammengefaßt.

Die Hofstatt hat sich in den letzten Jahren stark verändert. von 1955—1975 wurden 85 % der Hauptgebäude aller landwirtschaftlichen Betriebe und 75 % der Wohngebäude und landwirtschaftlichen Einrichtungen wie Scheune und Viehstall neu-oder umgebaut. Auch wurden in fast allen Gebieten Blumenbeete und Gemüseärten eingerichtet oder erweitert und der Hof von Ziegelstein, Drahtnetz, Hecke (hauptsächlich Buchs) usw. umzäunt. Unter diesen Umständen werden die landwirtschaftlichen Betriebe nach ihren Veränderungen der Hofstatt und der Hausstruktur räumlich in zwei Gruppen geteilt (Abb. 10).

Eine Gruppe bilden die landwirtschaftlichen Betriebe, die innerhalb 15~20 km von Stadtzentrum entfernt liegen. In diesen Betrieben werden folgende Veränderungen durchgeführt: Neubau des Hauptgebäudes oder Umbau wie Erstellung einer Zentralheizung und Wasserleitung, Umgestaltung des Badezimmers und der Toilette, Neugestaltung des Schlaf- und Kinderzimmers usw. und damit zusammenhängende erneute Anstriche der Wände, Erneuerung der Teppiche und Böden, Verschönerung mit neuen Ziegelsteinen usw. Auch werden die Wirtschaftsteile verbessert wie Neugestaltung von Kuh-, Schweinestall und Scheune und die Kühlkammer wird infolge Eingang der Kühleinrichtung neugebaut usw. Außerdem entstehen im Hof neue Mietshäuser. Die Scheune wird zum Mietshaus oder Mietzimmer und somit neu-oder umgebaut. Ein Lagerhaus wird errichtet, Blumenbeete und Garten eingerichtet oder erweitert und eine Hecke oder Drahtzaun um den Hof gezogen.

Die andere Gruppe bilden die landwirtschaftlichen Betriebe außerhalb 15~20 km von Stadtzentrum entfernt. Die hier liegenden landwirtschaftlichen Betriebe zeigen der Hausstruktur nach den schon erwähnten Betrieben gleichende Veränderungen. Aber Wandel der Hofbenutzung ist von der oberen Gruppen verschieden. Obwohl die Scheune neu-oder umgebaut und Blumenbeete und Gärten eingerichtet oder erweitert werden, gibt es kein Mietshaus und nur wenig Hecke und Drahtzaun um den Hof.

Das Auftreten dieser räumlichen Verschiedenheit beruht auf den unterschiedlichen Anpassungsformen der landwirtschaftlichen Betriebe an die Verstädterung. Deshalb kann gesagt werden, daß sich in den nordwestlichen Randgebieten von Hamburg die Hofstatt der Verstädterung entsprechend verändert.